

同地は方に籠城論の際中であつたから、悄々江戸に立歸り、申さば一黨中の別派として肺肝を摧きつゝあつた。従つて同志の義徒にも久しく其眞意を知られなかつた。が、吉田忠左衛門が江戸に下向し來るに及び、内藏助の本懐は漸く同志の間に分つて來た。『扱は左様でおはした敷。それとも悟らず、今迄小分の我々が力を量らず、個々に大望を達せんとしたのが裏恥かしい』と悔恨し、翌十五年の夏、源五右衛門等は俱に忠左衛門に就いて素志を明かし、其執成を以て内藏助に請願して、茲に始めて同盟に就いた。斯かる次第であるから、義徒の豪傑運は『彼少年果して義に死に得るや否や』など疑ふ者もあつたが、彼の志は堅確不動、一難を経る毎に一倍し來た。江赤見聞記、寺坂軍記、堀部安兵衛軍記。

茲に彼が決心の當初から如何に堅確であつたかを看る可き一事がある。凶變後彼が赤穂に赴く際であつた。家を發するに臨み、母堂に別を告げながら『此度赤穂へ下向いたしまするに就いては、自然滞在も永びく事と存じます。が、城中へ女性の文通は禁物におざります。假令ひ好便がおざりましても、必らず〳〵御文など下されぬやう、吳々も御願申上げて置きます』と言遺して立出た。蓋し彼の衷懷は明白である、彼の希望は復讐に在れども『赤穂に達した其際に、若しも一番は籠城し、方に戦争最中ともなり居らば、武士の意地、身は菊池七郎左衛門となつて、俱に討死するまである』との覺悟を極めたのである。自分は毎度之を言ふ『志士不忘轉溝壑。勇士不忘失其元』だ。此談は十郎左衛門細川邸に御預の日、例の堀内傳右衛門が内藤萬右衛門の家を訪ひ、十郎左衛門の消息を通じた際、母堂が喜んでの實話である。此母堂の名はお柳、

當時は剃髮して貞柳と稱し居た。

百八十八 全

十郎左衛門は主家退轉後、生家の姓に因んで、内藤十郎左衛門と稱し、芝の源助町に一戸を構へ、一僕を使うて生活した。乃て一擧の近づくに従ひ、村松三太夫、茅野和助來つて同宿し、相俱に敵情偵察に心力を傾倒した。彼は母に事へて至孝であつた。其の鐵砲洲邸に居た際には、母を長屋に引取つて奉侍したが、凶變以後は兄の許に歸らせた。既にして今年十二月、將に快擧を發せんとする際、母は偶々重病に墜り、且夕をも測られぬ状態であつたが、十郎左衛門は涕を揮ひ、慨然として義に赴いた。吁『今朝生別兼死別。唯有皇天后土知』だ。

彼は既に宋朝の麗質を有し、天性亦優雅にして、弓馬の業を事とする餘暇には、音樂の嗜好を棄てなかつた。彼が得意の鼓こそ主君の爲に圖書淨寫の手を愛惜して、之を廢したれ、彈琴の樂みは死に至るまで且つ休めず。死を賜うた後、彼の所持品を調べられた。其内に紫縮緬の袂紗から琴の爪一つ顛がり出たので、並居る細川の藩士たち、皆彼の優美なる心掛を感嘆した。昔は最後の戰場まで青葉の笛を手挟んだ敦盛あり。今は快擧の曉天まで玉琴の爪を携へた正久あり。後世まで之を傳へて美談とした。

尙此所持品調べの際であつたが、同人の着用した衣類の裏から、亦一つの香袋やうの物が出た。併ながら何の薫も無いので、終に判断が就かないで仕舞つた。後に堀内傳右衛門は職貝家の菩提

院敷、清久寺に詣でた時、此事を擧げて住持に話した。すると住持は之に答へ、『それは血脈けつみやくでござります。十郎左衛門存生の中、寺へ詣でられ、人の命は朝に夕べも測られぬ。自分も乃て遠國とくごくに赴く筈、何時何處にて果て申すかも存ぜられねばとて、それを請受けられました』との事に、扱さくはと主客俱しやくきゆうに坐まろ涙を催した。彼の死を決したことも、亦既に久しと謂ふ可しだ。

彼が義に赴いた際、其年齢は二十四歳であつた。他の諸同志十六名と俱に細川邸に預けられた後、一日同志の一人堀部彌兵衛は接伴の堀内氏に向ひ『此度吉良殿に討入つたのは、大概淺野家重恩の者共でおさる中に、十郎左衛門は一代の新知、彼が十四歳の時、拙者肝煎つて兒小姓に召出されたのが初でおさる。然るに最後の場合まで累代承恩の同志に劣らず、忠勤を勵んだ其健氣さ、老人共別して不便に存じます』と目をしばだいた。傳右衛門感嘆し、次の間に居る十郎左衛門に此話を傳へると、彼は打ちほろむ『老人好きやうに御話申上げたと見えます。如何にも私一代の新知ではおざりますれど、幼少より召抱へられ、段々の御取立、下し置かれた長屋なども廣く、老母もゆる／＼同居することを得ました次第、重恩の者に更々相違は無い身でおざります』と答へた。彼が芳名を後世に流したのも、抑、亦偶然で無い。

附言。文學者は兎角に佳字を用ゐたがる。彼の姓は礧貝であるのを、多くの書に何時か礧貝に書改めた。要らざる文字いじり、礧貝は礧貝で善いでは無い歟。

百八十九 富森助右衛門

最後に富森助右衛門正因とみのもりの經歷を講じよう。彼の父助太夫は赤穂侯に事へて、御留守居を勤めた。御留守居は藩中に於ても重要な職、助太夫の之に任じ居た一事に視ても、其人の凡庸で無かつたのが知れる。助右衛門は其後を承けて、内匠頭長矩ながたかに事へ、二百石を食して、馬廻うままわに列し、御使役を兼ねた。彼は人となり豪健にして、才氣も亦衆に超え、殊に言語明晰にして、事理を論ずれば、其意を必達するに足るものがあつた。それで此點に於ては先輩で吉田忠左衛門、後輩で富森助右衛門と並び稱された。彼が始めて御使役となつたのは、十九歳の時であつたが、彼は其職責を曠あはうせざらんと欲し、即日から乗馬一頭を蓄へた。其志既に尋常に非ずと謂ふ可きである。既にして元祿六年十二月水谷家斷絶の際、内匠頭長矩に水谷家の封邑備中の松山城受取を命ぜられた。それで直ちに此事を赤穂城代内藏助に報じ、城受取の準備をさせねばならぬ。助右衛門は其報告使に立てられた。彼は仰を承るや否や、我家にも立寄らず、驛傳の早駕を飛ばせ、百五十餘里の道程を晝夜追通し、六日目に赤穂に達したので、人皆驚いて、飛鳥も及ばずと感稱した。

彼は平生から何時も二十兩の金を懐にし、之を離すといふことが無い。彼はいふ『士さむらいたる者は何時如何なる事變に遭遇し、如何なる御用を仰せつけられるやも測られぬ。其時に豫め用意が無ければ、覺えず後れを取るであらう』と。只此一事でも、彼が不斷の心掛を察することが出来る。主家の凶變發した時、彼の母堂は助右衛門と俱に鐵砲洲邸内の長屋に居たが、深く之を悲み憤り『内匠頭様には御切腹仰付けられながら、上野介様は其儘に御擱さかき遊ばされるとは、近頃片手打の御仕置、此上は是非に及びませぬ……』と助右衛門に諷示した。母あること斯くの如し。助右

衛門たる者之を奈何ぞ感奮せざらんや。是時から彼は復讐の志を決した。

彼は乃て母方の祖父に因み、山本長左衛門と變稱し、或傳手あるにまかせ、川崎在の平間村に一屋を新築し、討入の當年まで此に住し、折々出府しては同志と語らひ、警家を窺つたが、時機の迫々切迫し來るに隨ひ、此にては何かと不便である所から、新麴町五丁目に一戸を借受け、妻子と俱に之に引移つた。既にして一黨の總統領内藏助下向の事となつたが、此人突然江戸に乗込む事とならば、一時に市中の評判とならん虞がある。それで吉田忠左衛門は助右衛門と相議し、助右衛門が平間村の宅を修繕して、此に先づ内藏助を迎へる事にした。所謂内藏助が平間村の僑居とは、此新宅の事であつた。

斯くて助右衛門は新麴町五丁目の借宅に居て、同志と俱に夜々上野介が本庄邸の光景を窺つた。後に彼は細川邸に御預となつた時、宿直の士に語つて『吉良殿邸は總體平長屋で、竹の腰板を打ち、壁も中塗ぐらゐであつた。それで屋内の火が透いて見える。其火影に窺へば、用心如何にも堅固の體でおざる故、此方の槍などは短いが利であらうと相談し、大概九尺許に切縮めた』といつた。其用意も亦實に周到では無い歟。

彼の忠烈と勇武とは、大要右の通りであるが、『有武備者、亦有文事』夫子は人を欺かず。彼は居常文學を樂み、和歌にも指を染め、俳句は最も彼の得意とする所であつた。快學の且た子葉が沾徳に與へた書中に『春帆、竹平も同じ道にて候、涓泉は御存の如くに有之候』とある。子葉は大高源五、竹平は神崎與五郎、涓泉は萱野三平、春帆は富森助右衛門である。

百九十 四十七烈士 其分限

中 呼最初主家の變報始めて赤穂に達した際には、城中に來會した者三百餘人と註されたが、籠城、續いて殉死の神盟には忽ち六十一人に減じ、中頃主家再興の希望良依稀けば、同盟は百二十四人に達し、其中橋本、萱野、矢頭、岡野の四烈士の一擧に先だつて世を棄てたのを除いても、尙百二十人の同盟を算せしが、一黨東下の日に及び、急轉落下して、五十五人となつた。扱は是だけは最早大丈夫かと思ひの外、去來討入といふ場合となつて、全く残り留まつた鐵心石腸の義徒の數は、以上に講じ來た諸士にして、此際まで現存する人々と、統領大石父子とを合せ、僅に四十七人となつた。人心の頼み難き、古今同嘆の外は無い。さりながら高が五萬三千五百石の一小藩から、其誠忠、日月と光を争ふほどの忠臣義士四十七人を輩出したのは、流石に世々の淺野侯が賢に禮し、士を愛し、名節を砥礪せられた結果である。甚しい哉名教節義の崇尚せざる可からざるや。茲に當時藩藉の地位に由り、四十七烈士を歴擧すれば、實に左の通りである。

- 大石内藏助良雄 家老 千五百石 同 主 税金
- 片岡源五右衛門高房 内證用人兼 兒小姓頭 三百五十石 原 惣右衛門元辰 足 輕頭 三百石
- 堀部彌兵衛金丸 (元江戸留守居三百石) 近松勘六行重 馬廻 二百五十石
- 吉田忠左衛門兼亮 兼足郡 二百石 同 澤右衛門兼貞
- 間瀬久太夫正明 大目付 二百石 同 孫九郎正辰

堀部安兵衛武庸	馬廻	二百石	潮田又之丞高教	馬廻兼國	二百石
富森助右衛門正因	馬廻兼使役	二百石	赤埴源藏重賢	馬廻	二百石
不破數右衛門正種	(元馬廻)	百石	岡野金右衛門包秀	(物頭並)	二百石
小野寺十内秀和	京都留守居	百五十石	幸右衛門秀富		
奥田孫太夫重盛	馬廻兼武具	百五十石	貞右衛門行高		
大石瀨左衛門信清	馬廻	百五十石	木村岡右衛門貞行	馬廻	百五十石
矢田五郎右衛門助武	馬廻	百五十石	早水藤左衛門滿堯	馬廻	百五十石
磯貝十郎左衛門正久	物頭並	百五十石	間喜兵衛光延	馬廻	百石
同 十次郎光興			同 新 六光風		
中村勘助正辰	馬廻	百石	菅谷半之丞政利	馬廻兼代官	百石
千馬三郎兵衛光忠	馬廻	百石	村松喜兵衛秀直	中 <small>小姓兼</small> 奉行持	五十石
同 三太夫高直			岡島八十右衛門常樹	中 <small>小姓</small> 奉行持	五十石
大高源五忠雄	中 <small>小姓兼</small> 腰物方	五十石	倉橋傳介武幸	中 <small>小姓</small> 奉行持	五十石
矢頭右衛門七教兼	兒小姓	五十石	勝田新左衛門武堯	中 <small>小姓</small> 奉行持	五十石
前原伊助宗房	中 <small>小姓</small> 奉行	三十石	貝賀彌左衛門友信	中 <small>小姓</small> 奉行	三十石
武林唯七隆重	中 <small>小姓</small> 奉行	三十石	杉野十平次次房	中 <small>小姓</small> 奉行	三十石
神崎與五郎則休	横目	三十石	茅野和助常成	横目	三十石

横川 勘 平宗利 歩 行 金五兩 三人扶持 三村次郎左衛門包常 臺所役 七人扶持
 寺坂 吉右衛門信行 足 輕

附言。父子は相承く可き者、故に假に並べ置く。職、祿、諸書に異同あり。茲には赤穂分限牒に據る。

百九十一 ピラミード論

義徒四十七人を赤穂藩藉の地位から竝べ觀て、自分は尠からぬ興味を感じる。即ち政事學上から尠からぬ興味を感じる。兎いふは、赤穂は高が僅々五萬三千五百石の一小藩、斯かる小藩に於て、百石以上の士といへば、加賀や薩摩等諸大藩の五百石以上のそれにも匹敵す可きである。然るに一擧の義徒に觀れば、四十有七人中の二十九人までは、百石以上、若くはそれと同格の士である。即ち一黨の約三分の二までは、歴々の上士であつた。是に由つて知ることが出来るのは、當時の風潮が如何に文恬武熙にして、華奢風流なる所謂元祿時代を開き來たと云へ、戰國の流風餘韻は、尙社會の何處にか存し『高祿の士たる者は一國の大事に當らざる可からず』といふ尙す可き連帶責任が、まだ上流の社會を約し居た一事である。

之と同時に欣ぶ可き新現象は中流以下の社會に發生した。義徒の三分の一以上即ち十八人までは、二十石、十石、甚しきは五兩三人扶持の徒行横目までを籠めた寒素の下士輩であつた一事で

ある。設たひ一人二人とはいへ、臺所の味噌用人三村次郎左衛門や、股立取つて駕先を警驛した足輕寺坂吉右衛門までが、之に参加し來た一事である。惟ふに是は徳川氏が八十餘年間の治平を開いて、教育を士籍にまで及ぼした結果である。就中淺野家三世が名節を以て一藩を砥礪した結果である。兎にも角にも、少數とは云へ、共同徳責ソリケテモトモが下流の士人をまで約するに至つたのは、實に國民の一進歩と謂はねばならぬ。

既にして月日は再び百五十餘年流れ去つた。此一世紀半の間に、肉食者流は概ね腐敗した。諸侯は立物、卿大夫は泥工ぬいこうの坊、多くは物の用にも立たぬ祿盜となり了つた。代りに名教の範圍は擴大して、社稷の憂は中流以下下流の士人の雙肩にまで落ち來つた。之を嘉永及安政以降に看よ。西郷吉之助は茶坊主より起り、大村益次郎は藪醫者から奮ひ、眞木和泉まきわづみは神主から立ち、月照法師は寺から飛出す。今に於て之を思へ、半島帝國の副王殿下も、元を質せば、桂小五郎家來の者ではおはさぬ歟。即ち明治の中興を形作つたのは、元祿の義徒に反比例し、百石以下の沈竹ちんちく士さしが七八分で、残る二三分が上士であつた。

それから亦又四五十年、我等が生息する現代を顧念せよ。國民護國は義務となる。立憲政體まで敲出す。政事は平民の社會にまで擴大した。さらば此邊が行止り歟。まだ前途に曠野がある。現代は同じ平民中でも富豪社會が狐鼠こねずみに政事に參預するのみである。今一息の擴大を要する。到頭社稷の憂を取て、熊公蜂公が雙肩に分擔する邊まで至つて、始めて帝國の富強は談ず可く、同時に日本の隆昌は庶幾す可しだ。

それで自分は常に謂ふ、史的に、政的に、政事は宛然たるピラミッド形である。君主專制が其頂邊、寡人政治が八合目、封建政治が五六合、統一君制で二合目となり、富豪や官僚で現映した立憲政治が一合目、今一息でピラミッド塔麓の平坦々たる國民政治。お互ひ明治現代の忠臣義士は此地に向つて邁進す可しだ。

百九十二 名士の同情

寺井玄溪、同玄達
大石内藏助の書、内海道徳

中

義徒は既に悉く江戸に聚中した。此に至るまでの一黨の苦心と及其經歷の大要も、亦既に概述した。此際此一舉に關し、或は直接に、或は間接に、あらん限りの同情を寄せ、之を援助したる人々の上を一顧しよう。其隨一としては、寺井玄溪父子を推さねばならぬ。

篇

玄溪の父は本多出雲守政利に事へて居たが、政利一旦國除かれたから、玄溪父子俱に浪人となつた。が、玄溪は醫道に精しいので、京都に隠れて町醫となつた。内匠頭長矩其名を聞かれ、元祿十三年、三百石十五人扶持の高祿を以て召出され、醫官に列せられた。其人の尋常の士で無いのは、此一事でも察せられる。斯くして彼は鐵砲洲の邸に居たが、未だ二箇年にも充たざるに主家の凶變は發したのである。輕薄の徒ならば、其儘此藩を去る可き所。然も彼は此變に會するや、深く之を憤慨し、直ちに赤穂に赴いて、内藏助と進退を俱にした。既にして一藩退轉の事となつたので、内藏助と前後して京都に出で、再び町醫を開業して、餘所目を繕ひながら、私ひそかに復讐の議に參預し居た。彼の才識既に人に超え、志操も亦堅確である。それで内藏助は大いに彼を器

重し、事毎に延いて相議した。それ故一舉の事に就き、參畫せざる所なき有様であつた。
 今元祿十五年七月廿八日の圓山會議に由つて、一黨總討入の議は決し、内藏助も近々江戸に下
 向しようとする。玄溪之を視て、自分も與俱にと主張する。内藏助は種々に之を止めたが、彼れ
 容易に承知せぬので、乃て彼に左の手束を寄せた。

『一筆致啓上候。兼て度々被仰聞候御内存之趣。承届御尤之至、別而致感心候。然共今度一同
 の御下りの儀は、拙者を始、同志之頭立候衆銘々にも申談候通り、御下りには不及儀と存候。
 御志を破り候段無御本意可被思召候得共、元來御勤方違候貴様之儀に候處、御同道仕候ては、
 此方より驅催候敷と萬一人口に可懸候段、互之無本意儀に候。勿論戰場へ醫役にて供奉之筈之
 儀に候。是はさすが戰場にては無之候。然ば御留り之儀却て道理當然と存候。御身命を厭ひ候
 て如斯申にては神以無之候。皆共何様にも罷成候跡にて、定而世間取々之毀譽可有之候。年月
 之寸志を能御存知之貴様にて候間、其時相應之噂被成下候儀、第一之御芳志と頼存候。此段御
 聞届、是非共に御留り可被成候。奥野將監も此頃被登、貴様御噂被申候。右同前に宜相心得、
 拙者より可申達と被申置候。猶惣右衛門、傳兵衛、源五左衛門、源四郎、十内等面談可申述候。
 恐惶謹言』

八月六日

寺井玄溪様 參

大石内藏助 判

情を盡くし理を盡くした上に、後事までも舉げて委嘱せられたので、玄溪も今は力なく『さら
 ば御一舉了るまで、攻めて忤にても御召連れ下されたい。御一同の御病氣又は御負傷の治療だけ
 にも致させたい』と申出た。内藏助始めそれまでも辭まんやうも無いので、是れだけは同意し
 た。

乃て義徒は追々に京畿を出發した。玄溪子息玄達は其後を逐つて江戸に着府し、本町一丁目七
 文字屋に獨り別宿を取つて、窃に同志の間に周旋し、觀事復讐の成功を見届けた後、十二月廿六
 日京都に歸り、顛末を父玄溪に報告した。

同じく赤穂の藩籍に在つて、是も醫官として内匠頭長矩に事へ、其氣節おさ／＼義徒に讓らざ
 る者は、内海道億である。彼は今でも東京の丸の内に道三橋の稱を留めた有名な幕府の御典醫曲
 直瀨道三に醫術を學んで、夙に成立する所あり。道億の稱も蓋し師の道三から得たのであらう。
 業成つて淺野家に召出だされ、十五人扶持を食して居た。主家の凶變以來、彼は深く感ずる所が
 あつて、全く醫業を廢し、京橋の三輪町町裏に隱棲して、義徒と往來し、絶えず復讐の謀議に參
 預した。彼は既に醫業を擲つた。それで何人が治療を頼んで來ても應じない。併ながら同志の一
 類が病氣といへば、心を盡して救護した。顧ふに義徒が江戸に隠れて醫家を窺ふた間、世上の手
 前、扱は其日の生計の爲に、醫者の眞似をした者が多い。是等は大概道億の事實的代診であつた
 らう。當時彼に之を問うたなら、イヤ新米の匙菴どもが拙手さ加減には閉口すると笑つたであら

う。斯くて愈々討入となつた際、彼は是非とも衆と俱に義に赴かうと主張した。されど内藏助始め寄つてたかつて、百方之を諭止したので、已むを得ず、一擧の列には加はらなかつたが、後に残つて、同志の遺族などの爲に、大いに其力を盡した。彼が如何に毅然たる一丈夫であつたらうかと云ふ事は、一黨の副統領吉田忠左衛門が細川邸に御預中、屢々彼の節義を稱し、又諸士が切腹前、内藏助が原惣右衛門に命じて、長文の書柬を作らせ、之を彼に寄せたのでも察せられる。

補 三輪町考

百九十三 全

大石無人、同三平、堀部九十郎、佐藤條右衛門

以上は直接に淺野家被官の人々であるが、此外にも義徒に熱い同情を寄せ、之が耳目となつて、間接に其擧を贊助した人も尠くない。其第一は大石無人等父子三人である。此三人に關しては曩に一たび講じた通りである。が、尙其の不足を茲に補はう。

大石無人は内藏助の同族、殊に瀬左衛門に對しては伯父であつた。此人名譽の士にて、故采女正長友の時代、同侯に事へて居たが、故あつて淺野家を去り、忠臣二君に事へざるの義を守つて、浪人した。其子二人、長は郷右衛門、次は三平といふ。兄弟ともに亦英物であつたと見え、郷右衛門は津輕越中守に抱へられ、御側用人の顯職となり、本庄の邸に居た。それで父の無人も、弟の三平も此に同棲し居たのである。同氣相求め、同心相照すで、無人は堀部彌兵衛と日頃から莫逆の交を爲した。淺野家凶變の際、彌兵衛は七十五歳、無人も七十五歳であつたが、一日無人は

彌兵衛に會し、

『自分只今浪人はいたせ、淺野家の御恩を蒙つた者、君父の讐とは俱に天を戴かれぬは、御同様でおざる。自分も是非に御一列の中に御差加へ下されたい』と申出た。彌兵衛聽いて頭を振り、

『御芳志のほどは千萬忝いが、併しそれは御無分別と申もの、最前は最前でおざれど、貴殿、淺野家を御離れなされてから、最早久しい事、況して唯今は子掛りのお身分ではおざらぬ歟。其義は平に御思止り下されたい』と諫争した。

『左様仰せられれば、それも道理、さりながら如何にも心概に堪へぬ次第、宜しうおざる、此上は御一列には加はらずとも、拙者の微衷を致す道の無いでもおざるまい。幸ひ二男の三平はまだ部屋住でおざるから……』

とて、是より無人と三平とは、心を戮せて、吉良家の動靜を偵察し、一々之を義徒に通知した。彼が片岡儀貞の兩士に激語して、内藏助の猛斷速發を催させたのも、此間の事であつた。上巻第九十一巻

而うして一黨の討入當夜、三平は遂に吉良邸まで追隨した。是は追て討入の場合に講じよう。附言。三宅觀瀾の「烈士報讐録」を著す際江戸の出來事は内藏助の堂親大石庄司良丸に質して書いたと記載し、其人は現に津輕氏に事ふと附記して居る。是は的然郷右衛門の事、蓋し郷右衛門後に名を庄司と改めたものと見える。

衛門後に名を庄司と改めたものと見える。

それから茲に又堀部彌兵衛が甥に、一人は堀部九十郎、一人は佐藤條右衛門といふ義勇の士があつた。何れも、當時浪人して居たが、復讐の快擧を贊成し、密々義徒の爲に大いに盡力した。就中條右衛門は安兵衛の従弟で、彼は往年長崎奉行諏訪明石といふ人に頼まれ、浪人のまゝ客分となつて、同じく長崎に在番中、破落戸の足輕ども互に結托して、恣に貨物の盜奪を企てた。條右衛門之を視て『已れ憎き奴原！』と叫びながら、單身之に向ひ、頭立つ者三人まで引捕へ、一々之に繩打つて、奉行の前に突出したほどの剛の者であつた。義徒總討入の當夜、此條右衛門と九十郎とは伯父の彌兵衛老人を扶けて、吉良邸まで赴き、大石三平と此に會して、間接に快擧を手傳つた。

百九十四 全

堀内源太左衛門
細井廣澤

此時代に江戸の劍客といへば、堀内源太左衛門正春を推した。打物執つては、實に海内無雙の豪傑であつた。従つて天下の勇士は雲の如く彼の門下に聚つた。義徒の中でも堀部安兵衛、奥田孫太夫七人まで其門人であつた。源太左衛門人となり、偶儻にして義を好み、夙に義徒が復讐の志あることを知り、外から私に其擧を幫助した。義徒が目的を達するまでに、彼の助力を得たことは、多大なものであつたらしい。

* * * * *

彼の劍術の門人に細井廣澤といふ一英物があつた。此人名は知愼、通稱は次郎太夫、廣澤は其號である。が、廣澤を以て世に知られた。彼は古の杜武庫とぶくらの如く、學問武藝通ぜざる所なく、而も皆其三昧に入つた。彼は業成つて柳澤出羽守吉保に事へ、大いに其信任を得た。世に批難の多い吉保が一生中に、此細井廣澤と荻生徂徠の兩名家を重用したのは、美談として傳へられたほどである。廣澤が如何に識見高邁の人であつた歟は、左の一事にて察することが出来る。當時の社會はと顧みれば、一世を擧つて、江戸の將軍あることを知つて、天子あることを知らぬ有様であつた。其間に立ちながら、彼は夙に尊王の志を抱き、深く御代々々の山陵の荒廢したのを嘆き、「山陵記」を著はして、主人出羽守に獻り、建言する所があつた。元祿十六年即ち赤穂の義徒が切腹の年を以て、幕府が始めて歴代御陵の修繕に従事するに至つたのは、廣澤建議の力預つて多きに居るのである。それで今上陛下の御代となり、明治三十年彼に従四位を追贈せられたほどである。彼の著述は多方に互つて、極めて多い。それだけ彼が多趣味にして、且つ博識多技であつたことも分る。が、中に就いて彼は最も書法に精しく、其書と書法に關する遺著とは後世まで傳稱されて居る。それで細井廣澤といへば、世人一般に書家として記憶し居て、彼が文武兼備の名士たることを多くは知らぬ、是は彼が餘りに能書家であつた爲に、其他を書名に掩はれたのである。

以上で彼が學識才藝の一斑は分るが、武藝にかけても、亦彼は一代の剛の者であつた。全體彼の人となり、方正剛直にして、其狀貌魁岸雄偉、一見して尋常の士で無いことが知れた。彼は談客にして、善く人と談論した。酒間一たび節義の談に及べば、慷慨激越、頭髮逆しまに立つの概があつた。彼は劍法を堀内源太左衛門に學んで、亦其蘊奥を極め、堀部安兵衛と相並んで、兩人ともに堀内門下の四天王中に數へられた。是等の縁故から、彼と安兵衛とは何時か莫逆の交となつた。快舉の前數日内藏助の意にて、一黨討入の趣意書を作らせた其冒頭に『君父の讐は俱に天を戴かず』とあるのを、安兵衛が見て、私に懸念し『禮記には單だ父の讐は……とのみあるを、君父の讐と改めても天下後世に嗤はれる恐はおざるまい歟』と相談したのも、此廣澤であつた。斯かる祕密まで打明けられるくらゐである。従つて廣澤が義徒の爲に骨を折つたのも、亦中々尋常では無かつた。

此他隠れたる豪傑の間接に義徒を助けた者も尠くは無かつたらう。彼の千馬三郎兵衛に頼まれ、或便宜に由つて敵情を偵察し、有力な報告を與へた名譽の一浪士の如き、或は堀部安兵衛に四方庵宗遍が吉良家に入出入することを教へ、且つ之に接近するの紹介を爲し、十二月十四日の茶會を探知するの緒を開いた浪士羽倉齋の如き、適其一二例である。

百九十五 義僕甚三郎

以上義人志士を列擧した序に、近松勘六の家來甚三郎が忠節を講じよう。

彼れ甚三郎は主人と同じく江州蛭田出身の者である。蓋し彼は近松家譜代の者と見える。勘六が最後の東行の際、扈從し來り、主人と同じく石町三丁目の本營に居て、骨身を愛ままず、忠々ましく主人の爲に働いた。既にして討入の期も漸く切迫し來たので、勘六は甚三郎に暇を取らせて、郷里に還さうと思ひ、一日彼に向つて、此意を諭した。すると甚三郎は恨めしさうに主人を看上げ、

『それは近頃お情ないお辭と存じます。私熟々皆様の御様子を窺ひまするに、思召立ちの御一擧も、最早近々の御事と見受けます。私、檀那の御供申上げ、故郷を出發いたしまする際、父は私に向ひまして、此度御主人の關東御下向は、並々ならぬ大事の御用と存ずる。隨分精を出し、身命を擲つて御奉公申上げよと懇々訓誡いたしておざります。父が此訓誡は私片時も忘れませぬ。然るに今日の場合に相成りまして、永の御暇を下されうとの御意、是は畢竟此甚三郎は能く物の御用に立たぬ奴とお見限りなされての御事と存じます。』

と言ひさして、獻すげ、

『斯く檀那に見限られました上は、是非もおざりませぬ。私退いて覺悟をいたします。』と、彼が切腹の決心は其辭色に顯然であつた。

吁三軍は帥を奪ふ可し。匹夫も志を奪ふ可からず。勘六は此體を視て深く感嘆し、
 『扱々さほどまでに自分に忠を存じて呉れる歟。さらば其方に申聞ける。實は大夫からの吩咐
 に、今回の一舉は故内匠頭様に御奉公いたした赤穂の藩士のみ限り、其他は如何なる縁故の
 者にても、一人も同行す可からずとの御嚴令である。それ故事に托してそれと無く暇を取らせ
 うと存じた次第、必らず悪く此意を取つて呉れるな』
 と、且つ慰め、且つ諭した。甚三郎之を聽いて、始めて首肯し、

『扱は左様な御趣意でおざつた歟。不肖なれども、此甚三郎、豫ねては御討入の其夜には、一分
 の勇戦を勵まんと、心に期して居りましたれど、御軍令とおざります上は、それに背きます
 る事、却つて檀那の御首尾にも關はりませう。さらば攻めて御討入御當夜の途中までなりとも、
 御供をお許し下されますやう、私一期の御願におざります』
 と申出た。勘六益々感嘆し、其儘甚三が希望に委せた。

扱も十二月十四日の夜となつた。甚三郎は甲斐々々しく扮装つて、主人勘六の後に引添ひ、吉
 良邸の表門前まで赴いた。一黨は討入る。戦闘は開始する。打物の響、矢叫の聲、漸く衰へ、漸
 く微かなる頃、凱歌の聲は天地を動かして、ドツと邸の中心から迸發した。扱は大勝利といふ間
 も無く、一黨の衣甲は血痕糝糊、人々満面の喜色を湛へて、雄風凜々門外へと出来る。甚三郎何
 時の間に買調へ來た歟、兩の袂に裂れる程蜜柑と餅を容れて、門前に待受け居たが、
 『皆様お目出度う存じます。さぞ御渴き、御空腹でおはしませう』

と言ひながら、蜜柑と餅とを人々に頒贈する。

『難有うよー』

『忝けない』

の聲は此處彼處に反應する。甚三郎の至情掬するに餘りあり。

彼は主人の手傷を勞つて、泉岳寺へ扈從し、仙石邸から細川邸へと主人の護送せられる途上も、
 後になり先になりて、見え隠れに附添うた。其後彼は當時谷中の長福寺に佛弟子となり居る勘六
 の弟文良が許に抵り、暫く滞留して、主人の動靜を聞合せ、同月二十四日悄然として郷里に向つ
 て歸り去つた。

後に勘六細川邸に在るの日、同志と四方山の話から、甚三郎の事に及び、

『彼が心情を思ひ出せば、實に不惑千萬でおざる。唯今となつて考へれば、疾く彼に苗氏をも
 遣はし、大夫に懇請して一黨中加入しなかつたのを、残念至極に存ずる』

と語り出で、悔恨流涕これを久しうするものがあつた。

附言。以上は義徒に熱烈の同情を有し、而も忠實誠懇なる堀内傳右衛門が近松勘六其人から直
 接に聴取り、且つ自身谷中の文良師をも訪うて、甚三郎の去就までを衝止め、而る後ち筆記し
 置いたのであるから、眞確疑を納れぬものである。然るに鳩巢一たび風聞に誤られ、之を片岡
 源五右衛門の僕元助として、其傳を立て、且つ俗説を受けて、其儘文字に飾つてから、後世の
 作者陳々相倚り、却つてそれを事實の如く信ぜしむるに至つた。兎もすれば古人は事に粗漏な

弊がある。鳩巢すら時に斯くの通りであるから、其餘は推して知る可しだ。彼の「一夕話」に載する片岡礪貝兩氏の僕平助文内が同一事談の如きに至つては、例の江戸製造の講釋師談に過ぎざるのみ。餘り製造し過ぎると、折角の美談も厭やになる。

百九十六 七十四醜夫 其分限

凡そ此一舉に關し、忠臣、孝子、節婦、賢母、俠士、義僕の人々が苦心經營は、上來講じ來た通りであるが、其傍から出たも出た、背盟忘義の七十四醜夫を續出した。其徒輩は實に左の奴原であつた。

奥野將監	千石	進藤源四郎	四百石	河村傳兵衛	四百石
河村太郎右衛門	傳兵衛	長澤六郎左衛門	三百五十石	長澤幾右衛門	六百左衛門
小山源五左衛門	三百石	小山彌六	源五左衛門	佐藤伊右衛門	三百石
佐藤兵右衛門	伊右衛門	大石孫四郎	三百石	月岡治右衛門	三百石
渡邊角兵衛	二百五十石	渡邊佐野右衛門	角兵衛	糟谷勘左衛門	二百五十石
糟谷五左衛門	勘左衛門	井口忠兵衛	二百五十石	木村傳左衛門	祿高不詳
稻川十郎右衛門	二百二十石	山上安左衛門	二百二十石	佐々小左衛門	二百石
佐々三左衛門	小左衛門	岡本次郎左衛門	二百石	岡本喜八郎	次郎左衛門
多藝太郎左衛門	二百石	平野半平	二百石	高田郡兵衛	二百石

井口半藏	二百石	高久長右衛門	二百石	木村孫右衛門	二百石
灰方藤兵衛	百五十石	上島彌助	百五十石	田中權右衛門	百五十石
幸田與惣右衛門	百五十石	里村津右衛門	百五十石	田中貞四郎	百五十石
鹽谷武右衛門	百五十石	前野新藏	百五十石	酒寄作右衛門	百五十石
中村清右衛門	百石	高谷儀左衛門	百石	仁平郷右衛門	百石
榎戸新介	百石	河田八兵衛	百石	嶺善左衛門	百石
田中代右衛門	百石	杉浦順左衛門	百石	近松貞六	百石
小幡彌右衛門	百石	松本新五左衛門	百石	山羽理左衛門	百石
中田理平次	百石	小山田庄左衛門	百石	田中序右衛門	八十石
近藤新五	六十石	鈴田重八	三十石	久下織右衛門	二十石
田中六郎左衛門	三十石	豐田八太夫	三十石	生瀬十左衛門	二十石
毛利小平太	二十石	大塚藤兵衛	五十石	各務八右衛門	五十石
吉田貞右衛門	三十石	陰山惣兵衛	三十石	猪子理兵衛	三十石
三輪喜兵衛	三十石	三輪彌九郎	喜兵衛	土田三郎右衛門	三十石
梶半左衛門	三十石	橋本次兵衛	三十石	倉橋八太夫	其人不詳
矢野伊助	足輕	瀬尾孫左衛門	内藏助	家來	

是れ皆最初の連盟以來、今十五年の春にかけ、内藏助の手許まで、前後に神文の盟書を納れた

のである。是等の無恥無羞漢が相互の關係を一瞥すれば、河村傳兵衛、同太郎右衛門、長澤六郎左衛門、同幾右衛門、小光源五左衛門、同彌六、佐藤伊右衛門、同兵右衛門、渡邊角兵衛、同佐野右衛門、糟谷勘左衛門、同五左衛門、佐々小左衛門、同三左衛門、岡本次郎左衛門、同喜八郎、三輪喜兵衛、同彌九郎は、揃ひも揃うて、父子ともに腰を抜かし、其他同族の者尠からず。觀來れば、眞誠の義臣に父子兄弟多きが如き、腰拔の背盟漢も亦一家親類を聚めて居る。古から『磁石吸鐵。琥珀拾芥』といふ。牛は牛連れ、馬は馬連れ、争はれぬものである。之に就いても人の人たる名譽を思ふ所の家庭には、平素から義方を崇尚しなければならぬ。父子の親も、君國の愛も、畢竟は皆箇中に在る。

之に對して神崎與五郎が草した「憤論」中の一節を意譯すれば、實に左の通りである。

『彼等奴輩が一時義盟に就きたるは、偏に亡君の貴弟世に出でらるゝとの浮説ありしに依りてなり。赤穂に在りて、世々君祿を食みながら、侯家の滅亡に會し、不善を爲す者山の如く淵の如しと雖も、是等は固より論ずるにも足らず。當初よりして義盟の員數に入らざりし者は、是れ頑弱の徒なるのみ。既に一たび之に入り、略同志の消息を知り、而る後ち逃れたる者に至りては、罪惡實に前者に倍徙せり。彼等跼天踏地すと雖も、宇宙の神靈豈之を宥し給はんや。天下後世其れ之を思ひ、其れ之を戒めよや』

と言つた。當時義徒の憤慨した狀を目のあたり睹る心地がする。横川勘平の書中にも亦之を論じて、

『去夏籠城之覺悟の節、臆病を働き、先非を悔い、大學殿善惡を窺ひ、様々申分いたし、テメテを以て、山科内藏助へ參り、首を下げ、手を束ね、同志の人數に入り、又今度之首尾に恐れ、すみやかに逃る大臆病者』

と喝破した。是等を筆誅總論とも謂はう歟。兎にも角にも誠忠日を貫ぬく四十七烈士の前に、其數を顛倒して、義なく恥なき七十四醜夫を出したのは、偶然とはいへ、寔に奇なる對照であつた。附言。以上列擧した背盟連の人名が普通の成書に在るものよりも多いのは、横川勘平、神崎與五郎が筆誅を加へた手書中に見える奴等を始め、最初の義盟に列しながら、最後の知れぬ輩までを、悉く收めたからである。是が最も眞確であると自信する。

百九十七 醜類 一束 高田郡兵衛

以上七十四醜夫の中、誰よりも早く、第一番に逃出したのは、高田郡兵衛であつた。『其進疾者、其退亦速也』といふ。古人は人を欺かず。彼は元來江戸士で、内匠頭長矩に召抱へられ、二百石を食して、近侍を勤め、文武の業にも涉つて、才氣ある男であり、日頃奥田孫太夫、堀部安兵衛と刎頸の交を爲した。去年三月凶變の一たび發した以來、孫太夫安兵衛と俱に讐家の動靜を偵察し、三人打揃うて赤穂に下つた際には、盛んに内藏助の開城論に反對し、死を決して籠城せんと、一藩の志士を勧誘するなど、如何にも誠忠無二の士と見えた。其後江戸に歸府してからも、原惣右衛門、大高源五等と聲息を通じ、寧ろ内藏助の漸進主義を手緩しと罵り、

如何にも急進派中の一領袖らしく見えた。が、根が虚勇を示せる輕薄才子であるから、内藏助は最初から彼に信を措かなかつたのである。

果せる哉、時日の経過するに従つて、彼の虚勇、彼の偽忠は剝けて來た。彼は浪人となつた以來、舎兄高田彌五兵衛と合宿して居たが、其頃彼が伯父にて、旗下の一人に内田三郎右衛門といふがあつて、高田兄弟と交際し、深く郡兵衛が才氣に惚込んで、養子にしたいと申込んだ。郡兵衛は辭する、兄の彌五兵衛も亦辭するが、三郎右衛門中々承引せず、是非にと迫る所から、彌五兵衛『實は舎弟は亡君の爲に同志と盟ひ、復讐の大望を抱いて居ります様子故、折角の仰聽けではおざれど、御望に應じ兼ねます』と告げた。すると三郎右衛門は目を圓くし『それは亦筋違ひの企、内匠頭殿は公儀から御仕置仰付けられ、公の法に伏せられたのである。然るに郡兵衛等徒黨を結び、復讐沙汰を唱へるに於ては、正しく上に仇するに異ならず。誠其儀ならば、我等公儀の直臣たる者、聞棄てにはなり申さぬ』と訴出かねぬ權幕となつた。郡兵衛之を立聞きして、周章て入來り『左様の儀は毛頭おざりませぬ。根も無い世上の風評に惑はされ、兄が邪推、近頃迷惑至極におざります。私辭退仕りますは全く以て身の不肖を省みましたる上の事、餘の儀もおざりませねば、尙善く／＼熟考いたし、御挨拶に及びませう』と、僅に其場を切抜けたといふ事である。

一日郡兵衛は悄然として堀部安兵衛が許をおとなひ、以上の出來事を擧げて、始終を物語り、『兄が遽忽から、取返し難い珍事を生じておざる。養子を斷れば、大事の發覺となり、養子とな

れば、一分の忠義は廢る。進退茲に谷つておざる。此上は方々の御面前にて切腹いたし、我志を明かにするより外はおざらぬ』と申出た。是は最初から脚色し來た狂言である。昔から他人に切腹の相談をする奴に限り、腹切つた例が無い。安兵衛之を聽いた時は、彼が日頃の氣象といひ、さぞ心中に憤慨したであらうが、口實が口實であるから、絶無の事とも斷ぜられぬ。萬一是等から大事が破綻でもしようなら、一黨の同志が、一年の苦心は、茲に全く水泡に歸する。それでヤツと憤怒を抑へ『事既に其處までに至つて居れば、切腹されても詮が無い。却つてそれが先方に疑念を加へさせる基とならう。暫く忍んで先方の望に従はれるも、亦忠義の爲である』と慰諭し呉れた。郡兵衛は吐の裏に『圖案が中つた』と悦んだであらうが、如何にも心外らしい面色を湛へて、此を辭し、今年正月の頃から全く脱盟の一人となつた。彼の狡繪實に悪む可しだ。

追々此事同志に知れる。年少の人々は切齒扼腕し『畜生！ 斫つて棄てよう』と敦圍いたのを、領袖の甲乙が懇に諭し『小不忍、亂大謀。暫く之を棄て置いて、彼に祕密を保たせ給へ』と止めたので、郡兵衛は首領を全うするを得た。命冥加な獸では無い歟。

百九十八 全

奥野將監、河村傳兵衛

高田郡兵衛はまだ言ふに足らぬ。背盟不義の首魁として、其罪容す可からざる者は、實に奥野將監である。彼が祖先山城半右衛門が武功は藩中に隠れ無く、藩祖は殊に之を寵用せられた。其餘澤を蒙つて、將監は祿壹千石を領して、番頭を勤め、夙に山鹿素行にも師事して、兵學の一端

をも解知し、名譽の士きせいのしの一人と稱せられ、凶變以來も盛んに正義を主張し、大野九郎兵衛が出奔以後は、内藏助と相並んで藩政に當り、本城引渡にも參預すれば、内藏助と同行して江戸にも出で、相伴うて荒木十左衛門の許にも答禮に赴き、内藏助からも多少重んぜられ、同志の諸士しよしからも崇められたが、時日の経過するに従つて、命が惜くなつて來た。さりながら多年名譽の士きせいのしとも稱せられた者が、命が惜くて同盟を脱したでは、世間に對して後ろめたい。それで彼は口實を按じ出した。『一黨の統領と頼む可き内藏助が放蕩濫行あのさまでは、俱に大事を成すに足らぬ、自分は實に彼に愛想が盡きた』と同志の前を繕うて、豫め遁逃の素地を爲した。狡黠も亦甚しい。併し八月頃までは依然同志の面貌を裝うて居た證據は、内藏助が同月六日付を以て、寺井玄溪の同行出府を諫め止めた手束中に『奥野將監も此頃登られ、貴様御噂申され候』とあるにても分明である。然るに愈々出發となり、去來同行をと促される段に至りて、全く背盟の本色を見はした。此點に於ては河村傳兵衛も同様であつた。彼も同じく前年末には内藏助の東下に隨行し、領袖顔を振蒔いた奴であつたが、是に至つて尾を曳いた。それで横川勘平は當時兩人の醜態を書附けて、

『奥野將監、河村傳兵衛、此兩人申は、いかに人が犬と申ても、死はかなしふ候間、得下り申さずと斷申す。笑止かな〜』

と嘲つた。蓋し顧ふに、此際内藏助は彼が偽忠に呆れ果て、早く之を唾棄したであらう、が若手の連中は憤懣に堪へず、憎さも憎しと迫りつけ、大に彼を詰責したらしい。是に至つて彼れ終に

化の皮を現はして、犬と言はれても命が惜いと、本音を吐出したと見える。何處まで下等な動物であらう。

それで後に内藏助は細川家に御預となつた時、接伴の土堀内傳右衛門に向ひ、彼が變心の事を語り出で、

『將監は千石を領して、番頭をも勤め、拙者と彼と兩人宛にて御目付より御書さへ賜はり、其後御禮の爲に、兩人同行して出府いたしました事もおざれば、其名は御老中方の御耳にまでも達して居ながら、終に量見を變へ、一列を脱しましたのは、寔に心外千萬でおざる』

と憤慨した。將監が没義悖德、是に由つても想ふ可きである。

附言。彼が墓は現に出羽街道の板谷峠に在ると傳へる者がある。若し在らば、彼も亦大野九郎兵衛等と一般、義徒一擧の後、畿甸の地に居た、まらず、是等の地方に逃込んで、身を匿したのであらう。それを例の二の備説に欺かれ、内藏助と内約して、米澤への遁路を扼したのなどと註を附ける徒輩がある。馬鹿に着ける藥が無いとは、是等に對する譬であらう。敵は早く江戸にて討取つたのに、好し内約があつたとて、終身板谷峠の上に、敵を待構へる阿房があらう歟。尙二の備説の取るに足らぬ事は、次の章にて講じよう。

百九十九 全

進藤源四郎
小山源五左衛門

進藤源四郎、小山源五左衛門の兩人も、亦凶變の際から同盟に列し、衆に抽ひきんで、正義を主張

した徒輩であつた。殊に進藤源四郎は内藏助の從弟であり、小山源五左衛門は内藏助の伯父であるから、赤穂退去後も源四郎は内藏助と俱に山科に來り、源五左衛門は此より程遠からぬ伏見に住し、絶えず内藏助の帷幄に參預した。従つて源四郎は去年九月、申さば内藏助名代として江戸に赴いたくらゐであつた。然るに時日の立つに隨ひ、復讐の爲に一命を棄てるのが畏ろしくなつて來た。それで兩人は相謀つて、何とかして内藏助が初志を翻へさせようと工夫した。彼美人阿輕を侷めて側室そばめに取持つたのも、大夫が精神を蕩かさんが爲であつたといふ説もあり、或は其れ然る可しだ。處が大夫の精神は、利害も移す能はず、好色も動かす能はずである、大學氏の左遷を耳にするや否や、直ちに自家の衷心から斷じ、大に堀部安兵衛等の説を容れて、直ちに江戸下向を決定したから、兩人は内心に大畏怖を生じ、引止策の口實を按出したが、流石に直接では面伏まぶせであつたと見え、寺井玄溪に托して、内藏助に忠告を納れた。『人臣として君家の讐を復せん事は、勿論の義におざれば、是迄も眞先に同盟し、忠誠を勵んだ次第におざる。然りながら彼を強大にして、警戒をさくく懈りを見ぬに、身方を願れば、同志の衆心一致せず、此班々の衆を以て、彼強大の敵に當るとも、容易く本意を達し得べしとも存ぜられぬ、畢竟同黨の若輩共が頻に囂々と騒ぎ立てるのは、今日の生活に困む苦し紛れに餓ゑ死せんよりも、狂ひ死して、責めて義名を得たいとの窮策から出た事と存ずる。我等は正しく貴殿の親族におざれば、固より存亡を俱にする覺悟、願はくば大夫、若輩共に誤られず、今暫く時機を見られるやう、偏に希望する次第

でおざる』と言つた。

内藏助は之を聴き、彼が日頃の温厚に似ず、斷々乎として其説を排し、曩に圓山會議の席上に宣示したる堂々の正論を繰返したる後ち『敵情は慥に見透みとおいて置いた。時機は方まはに此秋である。是れより以上は奮闘決戦仆れて後ち已むのみである』と、譬へば泰山喬嶽の如く、百搖すれども一撼せぬ。玄溪は固より正義の士であるから、深く内藏助の決心に感服し、急ぎ歸つて此旨を兩人に傳へ、併せて其同行を促した。兩人に忠義の心があつたなら、之に感奮せなければならぬ。が、根が容れられぬのを承知の上で、仕組んだ偽忠告であるから、之を聴いて心外らしい面貌を装ひ『内藏助の思慮如何にも淺薄である。それでは必らず大事を仕損ずる。此上は最早是非に及ばぬ。親族の好みも是れ限り、我々は後に残り、再舉の準備をするの外は無』と同志間に言觸らし、一黨發京の間際になつて、一朝にして變節漢となつた。

二百 全 再舉説の出處

進藤源四郎小山源五左衛門が言動は實に彼が如くであつたから、義士等は最も彼を疾視した。神崎與五郎は筆誅して曰く、

『小山進藤は大石君に縁ありて、死を共にせざる可からざる者なる也。然るに彼は言を爲して曰く、今事を果さんと欲する者は、皆餓死を惡みて、忠臣に似する者なるのみと。是れ何の謂ぞや。汝等こそ忠臣たるを棄て、飢倒を待つ者なるなれ』と。

横川勘平も亦彼等を評し『此兩人いかに死のおしければとて、内藏助を見捨て逃げらる可き歟。扱もくうたてし』と言つた。當時兩人の變節は誰も意外であつたと見え、一舉の翌年瑞光院の海首座が江戸に出府して、瑤泉院殿に伺候した時、未亡人は海首座に向ひ『大石京にての亂行を仄に聞きましたる時は、女心に疑ひ惑ひ、淺ましい事にも存じました。なれど進藤小山があれば、設ひ大石不義に落ちるとも、兩人はヨモ御家の御恥辱を餘所には見申すまいと、思ひ頼みて居りましたのに、此度の始末、實に呆れ果てました。御坊御歸洛なされましたなら、此意を兩人へ仰聽けられ、何故一舉に外れた歟、其譯精しう申越すやう、御傳へ下されたい』と囑されたから、首座は早速之を兩人に取次いだ。兩人之を聽いた時は、養由が箭先に向つたやうに、發矢と胸に答へたであらうが、根が横着な輩であるから『私共は内藏助が一舉の無謀無策を危ぶみましたから、彼等一たび誤らば、再舉して目的を達しまする覺悟にて、後に残つた次第におざります』と誠にやかに言上した。

是等が再舉説の出處であつて、今に至るまで奥野將監、進藤源四郎、小山源五左衛門等は二の備として引残つて居たのであるとの俗説が存在する所以である。此頃も何とやらいふ半可通が、如何にも當時の真相に通じて居るかの面つきして、賊臣等の辯護を費すのを耳にした。孟軻氏の口調ぢや無いが『能く言つて賊臣を禦く者は、賊臣の徒なり』といひたくなる。畢竟此徒は史眼に釘うち、斯かる場合に顯はれる忠姦勇怯の分れる所以を透見する明識が無いからである。人には誰でも天良がある。忠を嘉みして、不忠を斥ける。義を尙んで、不義を惡む者である。

四十七士の快舉一たび發するや否や、天下の人は舉つて感動し、大石は豪い、原は豪い、吉田は豪い、小野寺は豪い。それに就いても奥野は何だ、進藤は何だ、小山は何だと熱罵する。彼れ大野九郎兵衛の如きは、彼れが賣國黨の大野ださうだと、往來の摺違ひにも指目され、甚しきは彼奴が面に唾する士人もあつたので、京都に居たまれず、諸方に流浪した程である。一世の公制裁此に至つたから、日頃強がり忠義がつた奥野、進藤、小山輩は此公制裁に堪得ない所から、自家生存の必要上『實は自分等は再舉の爲に、二の備として扣へて居たのである』と言觸らし、僅に清議を避けようとしたのである。斯かる事相は古今に互つて幾回でもある。最も近いのは、明治十年九州の諸豪が相約して革命軍を興した時、最初盟約に就きながら、去來といふ場合になる、逃匿れた連中が續々出た。此連中が亂定まつた後ち、舊盟に對する面目なさに『實は其折再舉を謀る積りにて、兎もした、斯うもした』と口を極めて辯解した。是等が即ち第二第三の奥野、進藤、小山である。それを眞實だと引受ける空侗があらば、土佐の高知の播磨屋橋の何の某殿達を、西郷、桐野、篠原、村田等より百倍の英雄と崇拜するであらう。

此處である。愚人は巧言で欺かれうが、具眼の士は騙されぬ。奥野、進藤等が再舉談二の備談に會した時、『義臣傳』の作者深淵子は左の如く慨論した。

『若し良雄が勃興するを見て、時未だ到らずとして、少焉の生命を保ち、良雄が過ぎて仕損じた處を、再び興て必定事を遂終るべしとの眞忠ならば、四十餘人伏誅の後に至て、速に殉死して、其志を顯すに非ざれば、其義立難く、寺井玄溪を以て良雄が東行を止め、諫争したりし主

意立たず。爰を以て忠言空く偽りとなれり。兎角武人は宜く死然を得るを以て道とす。後人夫
恐れざるべけんや』

と言つた。武士道の本意は實に此に在る。神崎、横川等の義人諸子、幸に地下に安心し給へ。具
眼の士は萬世欺かれぬ。

二百一 全 一 束中の一 束

奥野、進藤、河村、小山に次いで憎む可きは、佐藤伊右衛門、佐々小左衛門、岡本次郎左衛門
等である。就中岡本次郎左衛門は當初から盛んに正義を主張して、内藏助の左右に在り、去年十
月内藏助出府の際には、河村傳兵衛と俱に一行に加はり、近くは最後の圓山會議にまで出席して、
忠義顔を假裝し居たが、内藏助出發間際に至つて、進藤小山等と同一の口實を作り、河村、小山
が其子と共に變節したやうに、岡本も其子喜八郎と同じく背盟した。横川勘平が之を叱して『此
父子奸人なり』と筆誅したのは、無理も無い。而うして他の佐藤、佐々も亦父子相率ゐて遁匿し
た。

それから内藏助が山科隠棲後に至つて神文を納れ、忽ち復た變節した者の隨一は、糟谷勘左衛
門であつた。彼は凶變の當時江戸に居て、安井彦右衛門に黨し、籠城殉死論に唇を反した奴であ
る。それが一旦主家復興の好望らしくなるを視て、先非を後悔し、忠義の魂を据ゑたと稱へ、内
藏助に懇願して同盟に入來たが、再興絶望となるや否や、直ちに逃去つた。杉浦順左衛門、井口

忠兵衛等も亦又勘左衛門と一轍に出た。其表裏も實に甚しい。之に對して横川勘平は藩士以外の
一志士龍田某に書を寄せて『此者共きたなき奴なり。當春伐て棄て申筈にて御座候處、手のびに
いたし、取逃し候て、残念く。若御參會も候はゞ、此旨御心得下さる可く候』と申遣つた。此
他多藝太郎左衛門、田中權右衛門の兩人も亦勘左衛門と行動を同うしたので、神崎與五郎から筆
誅された。

次に灰方藤兵衛は小野寺十内の室丹女の兄であつたが、背盟の爲に妹からまで義絶せられて、
器量を下げた一人であつた。

次に月岡治右衛門は主家再興嘆願の特使にまで選拔せられて、簡派された一人であるから、名
譽を思つたなら、變節の出来る義理では無いが、同盟に這入つたのも遅く、又逃出すには人よ
りも早かつた。是等を遅入早逃とも謂はう敷。

附言。横川勘平の書には、月岡の姓名が無くして、多川九左衛門を收めて居る。されど多川が
加盟の事嘗て見えず、而うして月岡獨り神崎の筆誅に上つて居るから、自分は神崎のそれに隨
つた。

*

*

*

*

*

次に呆れて評にも上らないのは、平野半平である。彼は故主の在世中には二百石を食し、最初
の連盟から一員に加はり、内藏助東下の間際まで追隨したが、統領は追々に軍費の空乏を告げ來

るので、家重代の什具までを賣却して、之に充てんと志し、其一分の賣却を半平に委任した。半平は領承して、熱心に周旋すると見えたが、乃て其什具を三十兩に賣上げるや否や、此代金を着服して、其儘跡を晦ました。下等な動物もあればあるものよ。

*

*

*

*

*

是等の同輩で最も滑稽な奴等は、生瀬十左衛門と土田三郎右衛門の兩人である。それは去七月中大學氏左遷の報到り、内藏助愈々快擧の斷行に決定したる際、同盟の眞意を試験せんが爲に、大高貝賀の兩士を分派して、大概一たび盟書を返させたが、何分百有餘名の士が遠近に散在して居ること故、一々手の及ばぬ處もあつたと見える。生瀬土田は各其一人である。其中に内藏助關東下向の由を漏聞いたから『ソレ愈々主家の御再興であらう、此時が忠義の見せ處だ』と、兩人は申合せ、晝夜兼行にて上京し内藏助の許を音なうて、

『頃日國許にて大夫江戸御出府の趣を傳承いたし、取る物も取り敢へず上京仕つた次第におざりまする』

と、如何にも忠義顔に述べたから、内藏助は深く感服し、

『それは如何にも大義でおざつた。實は大學殿斯くくの御仕儀、此上は猶豫す可きで無い。それ故最後の手段に出でるの外なしと存じ、出府に及ばんとする次第でおざる』

と告げた。覺悟を聽いて、兩人は見る／＼面色土の如く、身顫ひして、戦々畏れ、

『扱は……扱は……大事……其義におざりますれば、一旦歸國仕り、女房共とも善く／＼相談いたし、重ねて伺候仕るでおざりませう』

と言棄て、一目散に逃還つた。之を見て内藏助も笑へば、同志も哄笑する。横川勘平は之を親友に報ずるとて、筆を把つて再び『アラ笑止かな』と繰返した。

二百二 全

大石孫四郎

續紛として輩出した背盟者中に在つて、唯一人の酌量宥恕を加ふ可き者は、大石瀬左衛門が兄の孫四郎である。兄弟は赤穂退去の後、老母姉妹等と共に京都に出で、河原町に寓居したが、東行の切迫し來るに従ひ、孝子の心情を惱ますのは老母の上である。一日孫四郎は瀬左衛門に向ひ『我等兄弟忠義を存ずるは同様であるが、兩人俱に出發したならば、其日からお歳を召した母上はみす／＼路頭に迷はせられう。寧ろ一人は出で、君國に殉し、一人は留まつて孝養を盡すことにしては如何であらう』と相談した。老母を思ふの情は同一である。瀬左衛門は熟く／＼思按し『兄上の御分別も一理おはす。さらば兄上御留まり下されい。私一人關東に下向いたすでおざらう』といへば、孫四郎は之を遮り『否や、自分は當家の嫡男、淺野家世々の御恩に浴された父祖の跡目を相續いたす者である。討入の方は自分が當るほどに、御身は居残つて、孝養を全うせられい』といふ。『否や、それは私には……』『否や討入は自分が……』と互に相争つたが、果てしがつかぬ。『さらば鬪取にて去留を決ませう』とて、兩人は何れも丹誠を凝らし、我に勝

を受け給へと、神明に黙禱して、其鬮を採つたが、瀬左衛門の精神が天に通じた歟、討入の鬮は其手に歸した。瀬左衛門の満足、想ふ可しである。それで孫四郎は終に脱盟中の一人となつたとの事である。

今之を私情に問へば、孫四郎の脱盟だけは酌量す可からざるでは無い。併ながら老父母のあつた人は、四十七人中獨り此大石兄弟に止まらぬ。が、何れも『大義忘親』の理義に照して、之を振棄て來たのである。此點に於て孫四郎は道に暗いと謂はねばならぬ。のみならず。赤穂に於ける最初の連盟の際にも、瀬左衛門は奮つて之に加盟したが、孫四郎の名は見えぬ。彼の志操が果して世に傳へるほど堅確であつたや否やは、疑問である。何れの場合でも、何れの時でも、後に残つた者は、自家防衛上、種々の細工をする者である。孫四郎の如きも『亦從而作之辭』の一人では無かつた歟。現に舍弟の瀬左衛門が他の同志中十六人と俱に細川邸に御預となつた際、一日職貝十郎左衛門、富森助右衛門と三人打寄つて、四方山の話中に、助右衛門は瀬左衛門に向ひ、

『此三人の中にて、職貝殿は大出頭人であり、拙者は總領であつたから、此處まで來たのは當然であるが、大石殿は御次男ではおざらぬ歟。一列に加はらねば、加はらぬでも濟み申たらうに、寧ろ量見を變へられた御舍兄の分別の方が優しでは無い歟』と笑ひだした。すると瀬左衛門は眞赤になり、

『銘々の量見であるから、拙者力にも及び申さぬ』

と極めて迷惑さうに見えた。此親話に據つても、其裏の消息は窺はれる。

兎はいへ、彼孫四郎の心情は他の背盟者と同じで無かつた證據には、彼は一擧の後に至つても、義士の事跡を顯彰するに努めた跡がある。其人は爾後依然京都に住し、其名を改めて大石帶刀と稱し、享保年中には「赤穂分限牒」などを訂正し、史家の參考に供するなど、多少誠意を致して居る。

二百三 全

中村清右衛門、鈴田重八
中村理平次、小山田庄左衛門

斯くて一黨の東下前後まで、六十餘名の背盟者を出した。が、まだ十餘名は残つて居た。それで八月頃までは、折々先着義徒の僑居を訪ひ、田中六郎左衛門、木村傳左衛門、酒寄作右衛門等は出入しつゝ在つたが、九月に入つて、亦既に消失せた。さりながら是等は義徒から夙に信用を措かれぬ連中であつたから、言ふにも足らぬ。但だ中村清右衛門以下の八人は、内藏助東下後、再應の神盟にも列したから、五十五人の義徒として、諸領袖も計算し居たのである。茲に此奴共の行動を一顧しよう。

* * * * *

中村清右衛門は故内匠頭の近習として、凶變の際には鐵砲洲の邸に在り。職貝十郎左衛門等と亡主の遺骸を田村邸から引取つて泉岳寺に送り、同夜殉死の意を表して、薙髪した一人である。

それで身を抽んで、赤穂に赴き、最初の盟約から其列に加はり、今秋圓山會議の決定後、内藏助に先だち、鈴田重八と相伴うて、東下し來り、兩人ともに日々夜々吉田忠左衛門が僑居に出入し、如何にも忠義の士らしく見えたが、一擧の近づくに従ひ、市中の取沙汰を聞いて、俄に怯氣づき、清右衛門も重八も何時か其姿を匿して了つた。

又中田理平次は中頃から義盟に加はつたが八月下旬千馬三郎兵衛、間十次郎と同行し、九月七日に着府し來り、爾來是等の勇士と同居し、中田藤内など變稱して、何處までも諸士と死生を俱にするやに見えたが、其裏に命が惜くなり、是もドロンを極込んだ。

最も下劣であつた奴は、小山田庄左衛門である。彼は百石を領して、江戸定府の一人であつた。彼が父一閑は八旬の頽齡でこそあれ、名譽の老人であるから、庄左衛門を勵まして、義盟に就かした。それで一時は諸士と忠義を競ふやに見えたが、是も一擧の近づくに従ひ、中村清右衛門等と同様、臆病風に誘はれ、一日老父を見舞つて來ると稱して、同志の合宿を出で、片岡源五右衛門が南八町堀湊町の僑居に立寄り、折柄源五右衛門の不在に着込み、金子と小袖とを竊取り、其儘何處へか逃去つた。

附言。俗傳に據れば、小山田庄左衛門は快擧の當夜まで諸士と俱に吉良邸に討入る志にて、僑居を出で、一旗亭に立寄つて一杯傾けたが、一期の過、春を賣る酌婦に心を牽かされ、一杯、一杯、又一杯、終に大醉して前後を忘れ、酌婦の手を枕にして一睡し、目覺めて天窓を擦げれば、紅日三竿、終に永く不義の人となつたといふ。講談や浪華節などでは得意の談柄であれど、

其實彼が早く同志の金品を竊取して逃失せた事實は、横川勘平が友人に寄せた手書中に見える。是が何よりの證據である。兎にも角にも言語に斷えた動物では無い歟。

二百四 全

田中貞四郎、瀨尾孫左衛門、矢野伊助、毛利小平太

中
田中貞四郎も亦近習から進み、故内匠頭に寵任せられて、百五十石を食し、手廻頭にまで登庸された出頭人である。それで主君切腹の當夜には、中村清右衛門と同様に、他の片岡源五右衛門と磯貝十郎左衛門の眞似をして、其頭髮を斷ち、爾後常に片岡磯貝兩士に従ひ、別働隊として殊勝げに行動し居たが、時期の切迫し來るにつれて、怯氣づき、一朝同志の合宿を立出でたまふ、終に行方知れずとなつた。

篇

次に瀨尾孫左衛門は大石家の家長として、人にも知られ、内藏助赤穂退去後も、隨從して山科に來り、忠々しく一黨の爲に働き居たが、去來出發といふ場合に、進藤小山の徒が種々の口實を設けて、内藏助の東行を逗撓しようとした。其際に孫左衛門も其尾に跟いて『御兩所の御分別至極御尤かと存じます』など申出た事がある。之を聞いた内藏助は、早くも彼の心情を透見し『其方は淺野家に事へたといふでも無し。今日限り暇を取らする』と申渡した。すると孫左衛門は、此場合に暇を取つては、餘りに現金過ぎて、面目ないと思惟した歟、『それはお情ない。餘人

は兎も角も、私は御譜代の郎黨として、御家中にも知られた者、是非に殿の御先途まで御件申上げたく存じます」と再三懇願した。それで内藏助も詮方なく「さほどまでに申さば」とて、乃て東下の一人に加へられた男である。

次に矢野伊助は足輕の身分ながら、同盟に加はり、内藏助の爲に忠實らしく働くので一黨からは寺坂吉右衛門と雙び稱せられ、主税東下の際、一行に従つて江戸に來たのである。それで内藏助は前の孫左衛門と此伊助とに命じ、平間村の隱家に留守居をさせた。爾來兩人は誠實に此家を守つて居るやに見受けられたが、小人間居して不善を爲すの古言に漏れず、素養なき徒輩の常として、間居の徒然に、『自分はお足輕、お前は陪臣、二つと無い命を棄て、御一黨に加はらぬとも、さまで不忠にもなるまい』と談り合ひ、一舉に先だつこと僅々數日前、兩人は相携へ、上方へと逃歸つた。

終りに毛利小平太は如何に、彼は二十石三人扶持を食して、先君に事へ、凶變後中頃からとはいへ、一黨に入つて、忠義を競ひ、快學の議決するに及び、衆に先だつて、岡野金右衛門、武林唯七と同行し、閏八月に東下し來り、姓名を水原武右衛門と變稱して、目覺しく敵情の偵察に盡瘁した。其一端を擧げれば、一黨の東下後、市中の評判に據れば、吉良家の防備は非常の嚴重にて、惣長屋の内部には、更に一帶に大竹を用ゐて、堅固な障壁を結廻し、設ひ長屋を破つて亂入

しても、容易に奥へは進まれぬ由など噂した。斯くては大事と、一黨の本部は傳手を求めて、或方から吉良家の家老に宛た書柬を貰ひ受け、此書使を小平太に命じた。小平太は心得、乃て下男の扮装を爲し、敵營の虎穴に飛込んで、返書の出来るのを待つ間に、隈なく邸内を見廻し、世上に傳へるやうな防備の無い事を慥め來て、詳細に之を復命したほどである。彼は斯くまで力を盡しながら、一舉の前日に至り、如何なる天魔に魅せられた歟、忽ち其志を變じ、此歲月の盡瘁を水の泡に歸せしめた。

二百五 全

逃脫者の斯く續出したのに就いて、想ひ當る事がある。一黨の東下後、諸士を方々の僑居に分配した中に、中村清右衛門、鈴田重八、小山田庄左衛門、田中貞四郎の四人まで堀部安兵衛が本庄林町の借宅に合宿させた一事である。蓋し彼等は同盟に列して、此處までは行動を同うして來たものゝ、何處かに堅固で無い處があつたらしい。それで大石吉田等の領袖は相議し、之を一黨中の豪の者堀部安兵衛が許に托し、且つは監督させ、且つは激勵させたものと見える。諸領袖の用意も亦到れり盡せりだ。

但し堀部が林町の僑居には、此外に横川勘平、木村岡右衛門も同寓した。併ながら是等は最も早く東下し來り、寧ろ同氣相求めて、安兵衛が許に自ら投じたのであるから、前の四人が此家に分配せられて來たのとは、全然其動機が違ふ。のみならず、勘平が一舉の前に故郷の知友に與へ

た書中に、當時臆病風の一黨内に吹込んだ一因を論じて『尤内藏助仕方簡様に延々にいたし、方々へもれ候儀、よきとは難申候』といつて居る。而うして同じ書中に『拙者儀存寄御坐候間、先達而切腹仕候事も可有御坐候』と慨言する。顧ふに同宿から四人も揃つて、逃脫者を出だしたくらゐるであるから、一時黨中の情態は、慷慨義烈なること彼が如き宗利をして、一死以て他の腰拔連を激勵しようとしてまで決意させたものと見える。志士の苦心も亦掬す可きでは無い歟。

是に至つて自分は實に長嘆して已む能はざるものがある。彼れ八人の逃脫連と雖も、此處に至るまでには、他の尊敬す可き忠義の諸士と異ならざる幾多の辛酸を嘗めて來たに相違ない。殊に毛利小平太の如きは、一擧の前日まで、衆と勞苦を分ち來たのである。而うして去來討入といふ場合に臨み、其節を失うたので、終に永く不忠不義の人となつた。蓋し彼等は是に由つて五年か十年か生延びたであらう。併ながら是か爲に永く歴史上に光輝ある生命を喪ひ、加之其の五年か十年の殘生の憂苦、懊惱、悔恨、慙愧の裏に悶へ、此世からして焦熱地獄の底に陥つた。元祿快擧録を讀んで、士の最も留意す可き所は、實に是等の邊に在る。自ら一箇の「人」だと思ふ者は、猛省する所なかる可からず。吁眞に猛省する所なかる可からずだ。

附言。以上の背盟者八人が逃脫に就いて、小野寺十内の書、横川勘平の書、寺坂吉右衛門の覺書等を按ずるに、悉く時日に相違がある。蓋し兵馬倥傯の際には、得である事である。何れも記憶の誤りと思はれる。要するに彼等の逃脫は、内藏助の東下後、即ち十一月から十二月の間である。其中毛利小平太が最も後れて、十二月十三日即ち討入の前日まで残つて居た事だけは、

同日附にて内藏助が惠光良雪兩師に與へた書に『申合候者共四十八人』とあるので、明瞭である。それで毛利だけは其逃脫日を判然掲げ置く。

*

*

*

*

*

最後に疑問の一人は倉橋八太夫である。彼は最初の同盟に其名を呼出されたまゝで、諸書にも其後の消息を記したものが無い。而うして分限牒には此人の名のみは在るが、倉橋傳介の姓名が無い。お負けに傳介の名は最初の同盟にも列して居らぬ。是に由つて察すれば、八太夫は或は傳介と同一人ではあるまい歟。茲に附言して、後考を待つ。

二百六 大野父子の末路

事の因みに大野九郎兵衛が末路の一落を講じよう。彼が一藩の仕置家老として一回の同盟にすら加はらず、當初から姑息論を主張し、會議の席上では原惣右衛門から叱斥され、配當金受取の當夜には岡島八十右衛門から詰掛けられ、父子共に命辛々にて赤穂を逐天した事は、當時既に述べた通りである。^{上篇第五}^{十二卷} 其後九郎兵衛は郡右衛門と一地に落合ひ、處々を流浪した後ち、暫く京都に隠れて棲息した。が今年の八月に至り、最早預け置いた財産を取出すに好い頃と思ひ、郡右衛門と俱に赤穂に入込んで見たが、一つには彼が多年收斂の政を以て人民を困めたのと、國難以來非義不忠の擧を働いたのを惡むのと、二つには内藏助が一藩の離散に際しながら、藩債を還し、

藩札を引換へ、又身家を忘れて君國に盡したのを感嘆し居る町民は、内藏助の命令を今も嚴奉して、中々渡しさうでも無い。そこで九郎兵衛は此地に残り居る俗論黨の仲間近藤源八渡邊嘉兵衛と申し合せ、豫ねて荷物を預け置いた兩家の中の大津屋を訪うて、自分の財産を受取りたいと申込んだ。すると大津屋では『それは大石様から御封印なされ、町内一同にて固く之を保管致し、御許あるまでは、貴殿へ御渡申上げる事は相成らぬとの御嚴命におざりますれば、御氣の毒ながら、左様御承知下されたい』と挨拶した。九郎兵衛等却を責やし『自分の預品を自分が受取るに、内藏助などの預る所で無い』と争つてはみたが、中々聽入れぬ。其間に大野等が忍んで來たと聞いて、近隣からは聚り來る。事は面倒なりと見て取つたから『兎も角も今晚だけは世話になりた』とさり氣なく頼込んだ。賊臣とはいへ、昔日は御出入先であつたから、其れも成らぬとも斷りかね、厭や／＼ながら、一宿させると、人々の寢鎮まるを窺つて、案内知つた土藏の内に忍び入り、見覚えある箱を開いて、金參百兩を攫出し、表の方へと逃出した。それと悟つた大津屋は近所町内に合圖する。『其奴逃がして成るもの敷』と、總起ちになつて追掛けつゝ、終に後ろから追着いた。『サア其金を出す敷出さぬ敷。出さねば其儘には返さぬ』と、前後左右から追取巻く。九郎兵衛父子は戦へ上り、協はぬ處と參百兩を投げ出したが、町民は中々容赦せぬ。父子俱に其場から連還り、翌日赤穂の町中を引廻して、阿房拂を喫はした。

父子俱斯かる僂辱を加へられ、はふ／＼の體にて一旦京都まで逃上つたが、彼等の生命は只金のみである。それで此度は手を易へて、只管江戸におはす瑤泉院殿に向つて、何卒内藏助へ仰聞

けられて、私家財の封印を解き候ふ様御示諭の程を願ひ奉ると、幾度と無く嘆願書を差出し、又一方には京都室町二條に住める赤穂の商人綿屋善右衛門が内藏助の浪宅に出入するに頼り、鐵面皮にも直接に内藏助にも哀願させた。其中度々の嘆願に瑤泉院殿にも多少の愍を催された敷、事の序に九郎兵衛が然かく申出でたといふ事を、内藏助に通知された。内藏助が寛大の度量は是に至つて亦動き出した。大高源五等の如き壯年輩は之を聞いて『彼奴が財物を還附される事は無い。此際一切没收してお仕舞ひなされ』と切に警告してみたが、内藏助は受附けぬ。大津屋十右衛門、木屋庄兵衛宛にて、大野が財物、同人へ相渡せとの一札を認めて、前の綿屋に交附した。蓋し内藏助の胸中には『彼れぐらゐ懲戒を與へたから、最早呉れて遣つても善からう』といふのもあつたらうが、又一つには『彼が千兩か貳千兩かの財物を永く差押へ、其れが爲に謀略の妨碍などを招いてはならぬ』との用意もあつたのであらう。此財物を慥に還し與へた事は、後に内藏助が淺野大學に報告した書中に見える。當時九郎兵衛の喜び想ふ可しである。

凡そ内藏助の弘量大度は此類である。それで彼れ九郎兵衛を始め俗論黨の徒輩等も、内藏助の一舉にこそ同意し得ざれ、其人の義舉を妨げ、其人の徳に背くには忍びぬとの一點の良心は、尙彼等を司配したらしい。之を統ぶるに、内藏助は彼が如き大事を企て、而も兩年の久しきに互つたにも關はらず、閩藩の士民中一人の敵に欸を通じ、密告を爲す者の無かつたのは、實に何よりの證據である。吁『徳に在つて、力に在らず』だ。力は抑、其次である。大業を成さんと欲する人は、深く内藏助の徳量に鑑みなければならぬ。

附言。坊間の俗書には、九郎兵衛等が吉良家の走狗となつた事を、實しやかに傳へて居る。然も是れ亦内藏助に最負するの極、無根の美談を製造せると一般、九郎兵衛が憎さの餘り、構成し來つた空談に過ぎぬ。『身を下流に置く者には、天下の惡皆これに歸す』と、孟軻子の名言、其通りである。

二百七 全 其遺跡

元 九郎兵衛父子は内藏助の雅量に頼つて、自家の財物を受取る事が出来て、一安堵し、當分は京都に隠れ棲んだ。其裏に復讐の擧は發した。此報の四方に傳はるや否や、内藏助は豪い、四十七士は豪いとの評判は、京の街にも充ち満ちた。それにつけても彼れが大野よ、彼れが國賊よと、往來の行きすり違ひにも指目され、氣力ある連中からは、啖唾の一しぶき、拳骨の一礫ぐらゐは往々喫はせられうとする。流石の破廉恥漢も是では堪まらぬと、亦も此地を迷ひ出て、吾妻の空へと行く悲さ。淨瑠璃賽に流浪して、彼處に三年、此處に五年と鬱せき殘年を送り、終に上州磯部の邊に落着き、寺小屋の師匠をして、寛延四年九月に歿したといふ事である。今も磯部鑛泉の東十町ばかり、松岸寺といふ古刹の裏に「慈望遊謙墓」と題する一基の石塔があるのは、同人の墓だと傳へて居る。又一説には奥州の極端青森の在蟹田の邊に隠れ、矢張寺小屋をして居たとの説もある。何れにしても憐れに果敢ない最後を遂げたものと見える。『死す可き秋に死せざれば、死に勝るの恥あり』との語は、彼等が上にて觀る可しである。

○大野九郎兵衛が末路

中 陸奥の東津輕郡今別村（蟹田を北に距る數里の地）の本覺寺は、淨土宗に屬し、津輕外ヶ濱に於ける有名の伽藍にして、享保年代には貞得といへる名僧住し、天明の頃には民榮と稱する知識居たるを以て世に知らる。何時の頃よりか同寺に大野九郎兵衛は流れ來り、多年の間此に淹留したりしと云。從て地方に九郎兵衛が遺墨を傳ふるもの尠からず。現に今別村より北三里許りの三厩村郵便局長山田龜治氏が家には同家の庭園に在る「見山亭記」の一篇を有す。亦九郎兵衛の作り且つ筆せしものなりと云。

* * * * *

願ふに奥野將監が板谷峠の遺跡と稱するものも、亦此磯部、今別の類であらう。蓋し彼れ不義にして著名なる奴原は、人の知らぬ地方に遁込み、其邊にて窮死したのであらう。

考ふるに同村は西行法師が所謂『陸奥は奥床しくぞ思はるゝ壺の石碑外が濱風』の外が濱の地にて、附近には野田の玉川（外ヶ濱人は仙臺の伊達政宗に名所を盗まれたりといへり）もありて、景色絶佳なれば、風流人ならぬも、如何にも足を停め得らるべく、又一には不忠者の標本にて、何處にも排斥せらるゝの結果、廻り廻つて遂に極北の僻地に身を潜めたるに非ずやとも思はる、如何のものにや。（甲山逸史報）

岩波文庫

2166-2167

昭和十五年五月一日印刷
昭和十五年五月七日發行
昭和十六年三月一日第二刷發行



元禄快挙録 中篇 ★★
定價 四拾錢 ㊦

(永井製本)

著者

福本 日南

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波 茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井 赫太郎

精興社印刷

發行所

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話 〇〇一八八七・〇〇一八八八
九段 〇〇二二番(小) 〇〇一八八八番
振替口座東京二六一四〇番

小店出版物中、萬一不完全な品(落丁・亂丁等)がありましたら、御手数取り直しを御願ひ致します。たとへ御讀後でも早速お取替致します。

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を壓縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は絶えかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては厳選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのちるけしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫最新刊書

既刊二〇二冊(昭和十六年二月)

魅せられたる魂(一)	宮本正清譯	★★★
可愛	チエーホフ作 神西清譯	★
犬を連れたい奥さん	飯塚浩二譯	★★★
人文地理學原理 下卷	飯塚浩二譯	★★★
ケトレー人間に就いて 下卷	高野岩三郎校閱 平野貞藏譯	★★★
柳橋新誌	成島柳北著 藤田良平校訂	★
多情佛心 前編	里見淳作	★★★
紅樓夢(二)	曹雪芹作 松枝茂夫譯	★★★
デイジー・ミラー	ヘンリー・ジェイムズ作 渡邊純純譯	★
メゾン・テリエ他三篇	モーパッサン作 河盛好藏譯	★
マルサス穀物條例論	楠井隆三譯	★★
民俗學方法論	關克敬譯	★★

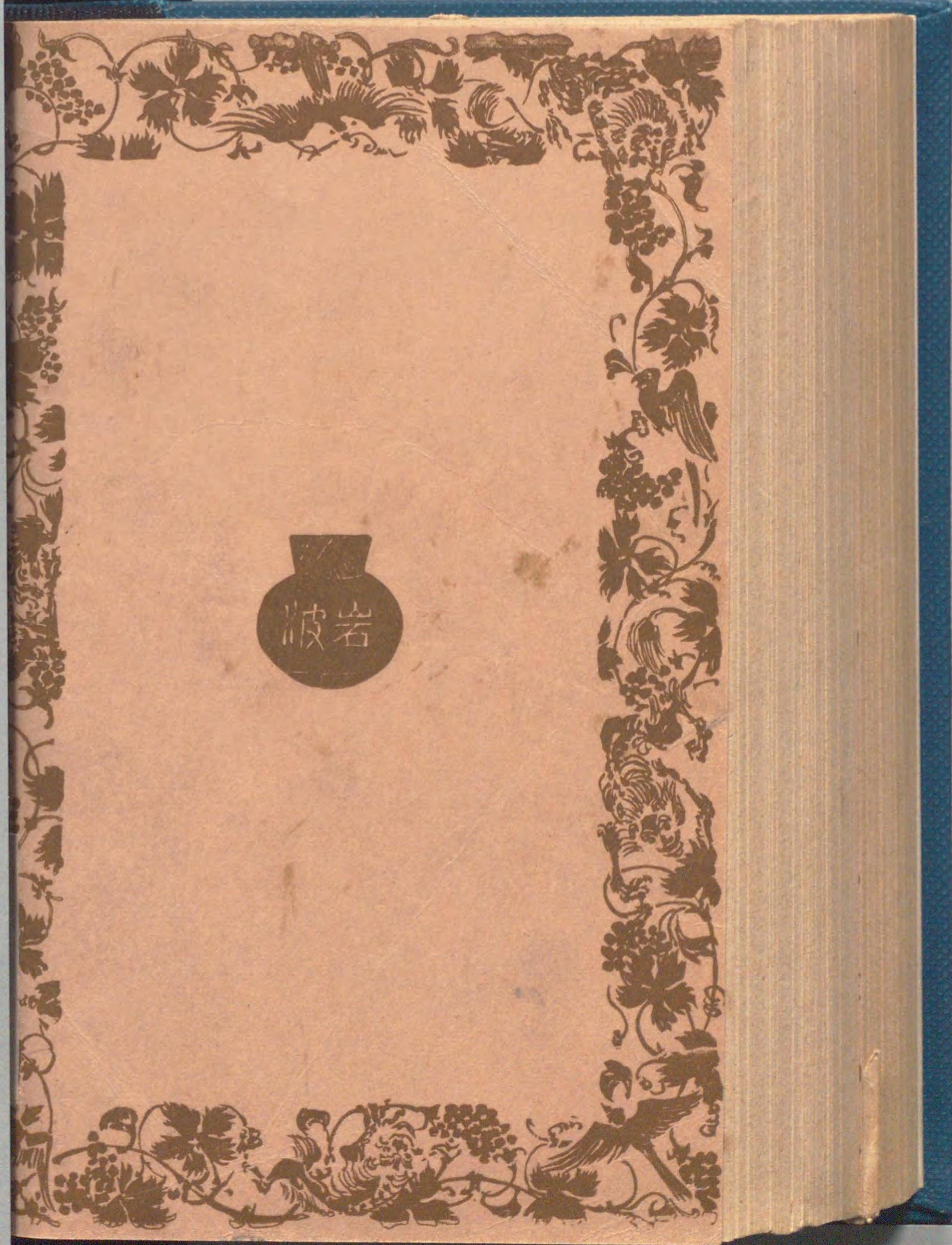
文庫 目錄

「解説目錄」當分品切乞御返承。
「書目綜覽」はあります。

芭蕉文集	頼原退藏編註	★★
元祿快舉錄 下篇	福本日南著	★★★
アエネーイス 上	ウエルギリウス著 田中秀央譯	★★★
骨董	木村滿三譯	★★★
ボウ詩論集	董平井程一譯	★★
聖アウグス告白	益田道三譯	★★
テイヌス告白	中卷 服部英次郎譯	★★
新葉和歌集	岩佐正校訂	★★★
浮城物語	矢野龍溪作	★★★
亞細亞の光	エドモン・アノール作 島村泰三譯	★★★
ゲエテとの對話 上卷	エツケルマン著 龜尾英四郎譯	★★★
魔の山(五)	トオマス・マン作 關泰祐譯	★★

ペートーヴェン書簡集 小松雄一郎選譯 ★★★
 吾妻鏡(三) 龍 應譯註 ★★★
 ヘッベル短篇集 賀吉捷郎譯 ★★
 いのちの十字路 シュトラウス作 大和邦太郎譯 ★★
 未成年中 ドストエフスキ作 米川正夫譯 ★★
 ブチャーの相 田中秀央譯 和辻哲郎譯 ★★
 スピノザ國家論 島中尙志譯 ★★
 勸進帳 守隨憲治校訂 ★★★
 思ひ出す事など 夏目漱石著 ★★
 修善寺日記 野上鶴一郎譯 ★★
 ガリヴァの航海上 スウイフト作 野上鶴一郎譯 ★★
 詩と眞實 上巻 ゲーテ著 小牧健夫譯 ★★
 弟 子 上巻 ブールジュエ作 内藤濯譯 ★★
 内藤濯譯 ★★
 ベルグソン著 平山高次譯 ★★
 道德と宗教の二源泉

イエス傳 ルナン編譯 ★★★
 妄想 他三篇 森 鷗外作 ★★
 中村憲吉歌集 齋藤茂吉選 土屋文明選 ★★
 斷章 上 小牧健夫譯 渡邊格司譯 ★★
 魅せられたる魂(二) 宮本正清譯 宮本正清譯 ★★
 政治問答 相原信作譯 相原信作譯 ★★
 シェイクスピアと 獨逸精神(上) グンドルフ著 竹内敏雄譯 ★★
 日本詩史 江村北海著 西澤道寛譯 ★★
 無限抱擁 瀧井孝作著 ★★
 ハックルベリーの冒険 上 中村爲治譯 マークトウェイン作 ★★
 アンデルセン童話集(五) 大畑末吉譯 ★★
 平子本上宮聖徳法王帝説 花山信勝校譯 家永三郎校譯 ★★
 マリヤの讃歌 他一篇 マルティン・ルター著 石原謙譯 ★★



波岩